

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：食創造科学科

資格：教授

氏名：蓬田 健太郎

研究分野	研究内容のキーワード
分子栄養学、分子生物学、発生生物学、再生医学	発生、成長、成熟、老化、癌化、再生、食育
学位	最終学歴
博士（医学）医学士	東北大学大学院 医学研究科 外科学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. Nutrition Science演習	2009年09月	新規に開講された演習の講義資料を作成し、Web上より配信した。
2. 分子栄養学	2009年09月	新たに開講された分子栄養学について担当分の講義資料を作成し、Web上から配信した。
3. 特別学期講義資料・国家試験対策	2009年07月	2009年度版管理栄養士国家試験対策講義資料を作成し、web上で配信した。
4. 学内講義資料：解剖生理学Ⅰ	2009年05月	練習問題を一部追加訂正をした。
5. 学内講義資料：解剖生理学Ⅱ	2009年04月	国家試験問題週に最新のものを追加した。
6. 特別学期講義資料・国家試験対策	2009年01月	2008年度版管理栄養士国家試験対策講義資料を作成し、web上で配信した。
7. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅰ	2008年09月	より実習内容の理解を深めるために、実習中に教員チェックを行うように改訂した。
8. 学内講義資料：解剖生理学Ⅰ	2008年09月	シラバス内容改訂にしたがい、全面的な再編改訂を行った。
9. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅱ	2008年04月	シラバスの一部改訂にしたがい、資料の改訂を行った。
10. 学内講義資料：解剖生理学Ⅱ	2008年04月	国家試験問題週に最新のものを追加した。
11. 国家試験対策・特別補講用資料・診断と治療	2007年09月	管理栄養士国家試験対策のための補講を実施し、このための講義用資料を改訂し、web上で配信した。
12. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅰ	2007年09月	前年度使用した資料を学生のレポートをもとに改訂した。
13. 学内講義資料：解剖生理学Ⅰ改訂版	2007年09月	前年度のものを改訂し、最新の国家試験問題も収録した。
14. 基礎化学実験講義資料	2007年04月	新カリキュラムへの移行に伴い基礎化学実験7回のうち5回分の講義資料を作成し、web上より配信した。
15. 基礎生物化学 生物編講義資料	2007年04月	新カリキュラムへの移行に伴い、基礎生物化学のうち生物編についての講義資料を作成し、webより配信した。
16. 特別学期講義資料・国家試験対策	2007年04月	2007年度版管理栄養士国家試験対策講義資料を作成し、web上で配信した。
17. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅱ	2007年04月	前年度作成の解剖生理学実習Ⅱについても改訂を行い、web上で講義資料を配信し、予習復習の徹底を行った。
18. 学内講義資料：解剖生理学Ⅱ	2007年04月	前年度作成した解剖生理学Ⅱの講義資料を国家試験問題とともに改訂し、認証式のweb上で配信した。
19. 特別学期講義資料・国家試験対策	2007年02月	2006年度版管理栄養士国家試験対策講義資料を作成し、web上で配信した。
20. 国家試験対策・特別補講用資料・診断と治療	2006年09月	管理栄養士国家試験対策のための補講を実施し、このための講義用資料を改訂し、web上で配信した。
21. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅰ	2006年09月	2005年度後期に大食1年後期に開講している解剖生理学実習Ⅰの講義資料を改訂したもの。当該年度より、分担で実習を行い、前クラス同一内容での実習内容とし、web上より配信した。
22. 学内講義資料：解剖生理学Ⅰ改訂版	2006年09月	前年度年度後期に大食1年に開講した解剖生理学Ⅰについての学内Web上で利用可能にしたもの。前年度のものを改訂し、過去の国家試験問題集も項目ごとに整理した。
23. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅱ	2006年04月	前年度作成の解剖生理学実習Ⅱについても改訂を行

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
24. 学内講義資料・解剖生理学Ⅱ	2006年04月	い、web上で講義資料を配信し、予習復習の徹底を行った。 前年度作成した解剖生理学Ⅱの講義資料を国家試験問題とともに改訂し、認証式のweb上で配信した。 管理栄養士国家試験対策講義資料を作成し、web上で配信した。 管理栄養士国家試験対策のための補講を実施し、このための講義用資料を作成し、web上で配信した。 2005年度後期に大食1年後期に開講している解剖生理学実習Ⅰの講義資料を改訂したもの。 2005年度後期に大食1年に開講した解剖生理学Ⅰについての学内Web上で利用可能にしたもの。前年度のものを改訂し、過去の国家試験問題集も項目ごとに整理した。 解剖生理学実習Ⅱについてもweb上で講義資料を配信し、予習復習の徹底を行った。 解剖生理学Ⅰに引き続き開講される解剖生理学Ⅱの講義資料を作成し、web上で配信した。 2004年度後期に短食2年に開講した病理学について、講義資料を学内Web上で利用可能としたもの。 2004年度後期に大食1年後期に開講している解剖生理学実習Ⅰの講義資料を学内Web上で利用可能としたもの。 2004年度後期に大食1年に開講した解剖生理学Ⅰについての学内Web上で利用可能にしたもの。過去の国家試験問題集も含んでいる。
25. 特別学期講義資料・国家試験対策	2006年02月	
26. 国家試験対策・特別補講用資料・診断と治療	2005年09月	
27. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅰ	2005年09月	
28. 学内講義資料：解剖生理学Ⅰ改訂版	2005年09月	
29. 学内講義資料・解剖生理学実習Ⅱ	2005年04月	
30. 学内講義資料・解剖生理学Ⅱ	2005年04月	
31. 学内講義資料：病理学	2004年09月	
32. 学内講義資料：解剖生理学実習Ⅰ	2004年09月	
33. 学内講義資料：解剖生理学Ⅰ	2004年09月	
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 臨床医（外科・外科救急）	1987年5月25日	医師免許取得後、外科研修医、外科レジデントとして研修。大学院進学以降、兼業として外科・外科救急の臨床を継続している。現在は、箕面市立病院の非常勤医師として救急外科を担当しており、臨床経験を講義実習に生かした指導を行っている。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 日本外科学会認定医	1991年12月	
2. 麻酔科標榜医	1991年09月	
3. 医師免許	1987年05月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. NEURODEGENERATIVE DISEASES	共	2011年11月	INTECH, Croatia	Kentaro Yomogida, Shumi Yoshida-Yamamoto, Hroshi Doi 神経変性疾患に関する総説集。第2章のRoles of Microtubules in Maintenance of Nerve Cell Networksを担当した。
2. 臨床栄養学概論	共	2011年10月	化学同人	秋山栄一、位田忍、鞍田美貴、鈴木一永、高岸和子、福田也寸子、古澤通生、蓬田健太郎 臨床栄養学の教科書。
3. おしえて！幼児の食育Q&A	共	2010年10月	武庫川女子大学出版部	蓬田健太郎、伊藤沙央里、遠藤倫代、山本周美、他13名 本学附属幼稚園で実施した食育活動から、保護者が日ごろから疑問に思うことに答えたQ&A集。監修も担当している。
4. Electroporation	単	2009年01月	Springer	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
and Sonoporaiton in Developmental Biology				発生生物学領域における生体内遺伝子導入法について概説したものの。第24章Electroporation of the testisを担当した。
2 学位論文				
1. マウス精巣におけるGATA-1転写因子の発現と精子形成との関連性についての研究	単	1995年3月	東北大学大学院医学研究科 博士課程 外科学専攻（医博第1265号）	赤血球分化制御に関わる転写因子GATA-1の精巣における発現細胞の同定と精子形成周期との関連性を明らかにしたものの
3 学術論文				
1. An oscillating magnetic field suppresses ice-crystal growth during rapid freezing of muscle tissue of mice	共	2024年3月3日	The Journal of Biochemistry, Volume 175, Issue 3, March 2024, Pages 245-252	微弱振動磁界付加凍結による凍結保存時の組織破壊抑制のメカニズムの解明をマウス下腿筋組織をモデル系として行ったもので、結合水の安定化による生体分子の安定化による氷晶抑制によることを明らかにした。
2. Data of the freezing curves of tuna blocks with or without the weak oscillating magnetic fields (査読付)	共	2020年08月01日	Data in Brief, 31 (2020) 105852 (Open Access)	微弱振動磁界がマグロのブロックの凍結時の温度変化に与える影響を示したものの Okuda K, Kawauchi A, <u>Yomogida Y</u>
3. Quality improvements to mackerel (Scomber japonicus) muscle tissue frozen using a rapid freezer with the weak oscillating magnetic fields (査読付)	共	2020年08月01日	Cryobiology Vol. 95, (2020) 130-137	微弱振動磁界が急速冷凍保存において、新鮮魚介類（サバ）の組織保存状態を劇的に改善することを明らかにしたものの Okuda K, Kawauchi A, <u>Yomogida Y</u>
4. The Arf GAP SMAP2 is necessary for organized vesicle budding from the trans-Golgi network and subsequent acrosome formation in spermatogenesis. (査読付)	共	2013年09月01日	Mol. Biol. Cell. vol. 24 (17), (2013)2633-2644	ARF GAP (ADP ribosylation factor GTPase activating protein)のSMAP2が、減数分裂期のマウス精母細胞から精子細胞に発現しており、ノックアウトマウスの解析から精子のアクロゾーム形成に必須であることを示したものの。 Funaki T, Kon S, Tanabe K, Natsume W, Sato S, Shimizu T, Yoshida N, Wong W, Ogura A, Ogawa T, Inoue K, Ogonuki N, Miki H, Mochida K, Endoh K, <u>Yomogida K</u> , Fukumoto M, Horai R, Iwakura Y, Ito C, Toshimori K, Watanabe T, Satake M
5. Rad18 is required for long-term maintenance of spermatogenesis in mouse testes. (査読付)	共	2009年03月01日	Mech Dev. vol. 126(3-4), (2009) 173-83.	遺伝子修復因子Rad18のノックアウトマウスを作成し、その機能解析を行ったもの。Rad18は生殖幹細胞の長期維持に必須であることが示された。 Sun J, <u>Yomogida K</u> , Sakao S, Yamamoto H, Yoshida K, Watanabe K, Morita T, Araki K, Yamamura K, Tateishi S
6. Mammalian testis: A target of in vivo electroporation. (査読付)	単	2008年07月04日	Develop. Growth & Differ. vol. 50, (2008) 513-515	生体内電氣的遺伝子導入法 (in vivo electroporation) による精巣への遺伝子導入の原理と応用について概説したものの
7. ESE-1 inhibits the invasion of oral squamous cell carcinoma in	共	2008年06月07日	Oral Dis. vol. 14, Issue2, (2008)144-149	上皮組織で発現している転写因子ESE-1が、タンパク質分解酵素MMP-9の発現抑制により口腔扁平上皮癌の組織浸潤性を抑制していることを明らかにしたものの。 Iwai S, Amekawa S, <u>Yomogida, K</u> , Sumi T, Nakazawa M, Yura Y,

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
conjunction with MMP-9 suppression. (査読付)				Nishimune Y, Nozaki M
8.The testes-specific bZip type transcription factor Tisp40 plays a role in ER stress responses and chromatin packaging during spermiogenesis. (査読付)	共	2006年11月01日	Genes Cells., vol.11(10), (2006) 1161-1171	半数体精子細胞特異的遺伝子Tisp40の機能について、ノックアウトマウスを作製し、DNAの折りたたみに重要な役割を果たすことを明らかにした。 Nagamori I, <u>Yomogida K</u> , Ikawa M, Okabe M, Yabuta N, Nojima H
9.Transcription factors, cAMP-responsive element modulator (CREM) and Tisp40, act in concert in postmeiotic transcriptional regulation. (査読付)	共	2006年04月04日	J. Biol. Chem., vol.281(22), (2006) 15073-18081	半数体精子細胞特異的に発現するTisp40が転写因子CREMとともに半数体特異的遺伝子の発現制御に関わることを示した。 Nagamori I, <u>Yomogida K</u> , Adams PD, Sassone-Corsi P, Nojima H
10.生殖幹細胞の維持と分化	単	2005年12月	HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY	生殖幹細胞が組織幹細胞の解析系モデルとして優れている点を解説し、生殖幹細胞研究の現状を概説したもの。
11.Regulated expression and dynamic changes in subnuclear localization of mammalian Rad18 under normal and genotoxic conditions. (査読付)	共	2005年08月	Genes to Cells, vol.10 (2005) 753-860	細胞周期のチェックポイントタンパク質の1つであるRad18の発現が精巣の減数分裂期で高いことを示し、Rad18が遺伝子組み換えに重要であることを示すとともに遺伝子修復でも重要な役割を担うことを示した。 Masuyama S, Tateishi S, <u>Yomogida K</u> , Nishimune Y, Suzuki K, Sakuraba Y, Inoue H, Ogawa M, Yamaizumi M.
12.Molecular cloning and functional characterization of mouse Nxf family gene products. (査読付)	共	2005年05月05日	Genomics, Vol.85, (2005) 641-653	マウスにおけるRNA核輸送タンパク質であるNFXファミリー遺伝子群のNFX2, NFX3, NFX7のクローニングとその発現様式を解析したもの。 Sasaki M, Takeda E, Takano K, <u>Yomogida K</u> , Katahira J, Yoneda Y.
13.A type I DnaJ homolog, DjA1, regulates androgen receptor signaling and spermatogenesis. (査読付)	共	2005年02月09日	EMBO J. vol.24 (3), (2005)611-22	小胞体ストレスに関わる分子シャペロンDjA1のノックアウトマウスを作出したところ、支持細胞機能に異常が生じ、精子形成を支持することができなくなる事を明らかにした。 Terada K, <u>Yomogida K</u> , Imai T, Kiyonari H, Takeda N, Kadomatsu T, Yano M, Aizawa S, Mori M.
14.Functional characterization of a mouse testicular olfactory receptor and its role in chemosensing and in regulation of sperm motility. (査読付)	共	2004年11月15日	J Cell Sci., vol.117 (2004) 5835-5845	嗅覚レセプターMOR23は、精子上にも発現している。MOR23を精子上の過剰発現させたトランスジェニックマウスを作出し、その機能解析を行ったところ、精子の遊走能に関与している事が明らかとなった。 Fukuda N, <u>Yomogida K</u> , Okabe M, Touhara K.
15.In vivo and in	共	2004年02月	Mol Cellular	転写因子GATA-4が幼若期のセルトリ細胞には発現しているこ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
vitro constant expression of GATA-4 in mouse postnatal Sertoli cells. (査読付)		12日	Endocrinol.214 (2004) 107-115	とを明らかにしたもの Imai T, Kawai Y, Yamamoto M, Nishimune Y, <u>Yomogida K.</u>
16. p53 protein interacts specifically with the meiosis-specific mammalian RecA-like protein DMCl in meiosis. (査読付)	共	2004年02月04日	Carcinogenesis. vol.214 (2004) 107-115	癌抑制遺伝子 p 5 3 が、減数分裂期にDMC1タンパク質と相互作用を示すことを明らかにしたもの Habu T, Wakabayashi N, Yoshida K, <u>Yomogida K.</u> , Nishimune Y, Morita T.
17. Isolation and characterization of a novel cDNA encoding a DNA-binding protein (Hils1) specifically expressed in testicular haploid germ cells. (査読付)	共	2003年12月01日	Int J Androl. vol.26(6):2004 354-65.	半数体特異的に発現する新規遺伝子Hils-1の特徴を明らかにした もの Iguchi N, Tanaka H, <u>Yomogida K.</u> , Nishimune Y.
18. Characterization of histone H2A.X expression in testis and specific labeling of germ cells at the commitment stage of meiosis with histone H2A.X promoter-enhanced green fluorescent protein transgene. (査読付)	共	2003年10月	Biol Reprod. vol.69(4), (2003) 1325-9.	H2AXのプロモーターを利用して生殖幹細胞にGFPマーキングを行い、H2AXの発現動態を明らかにし、生殖幹細胞の追跡を可能にした。 Tadokoro Y, <u>Yomogida K.</u> , Yagura Y, Yamada S, Okabe M, Nishimune Y.
19. Dramatic expansion of germinal stem cells by ectopically expressed human glial cell line-derived neurotrophic factor in mouse Sertoli cells. (査読付)	共	2003年10月	Biol Reprod. vol.69(4) (2003) 1303-7.	in vivo EP法によりGDNFをセルトリ細胞に導入することで、マウス精巣内で生殖幹細胞を劇的に増殖させることを可能にした。 <u>Yomogida K.</u> , Yagura Y, Tadokoro Y, Nishimune Y.
20. Novel actin-like proteins T-ACTIN 1 and T-ACTIN 2 are differentially expressed in the cytoplasm and nucleus of mouse haploid germ cells. (査読付)	共	2003年08月	Biol Reprod. vol.69(2) (2003) 475-482.	半数体特異的に発現する新規アクチン様タンパク質T-ACTIN1とT-ACTIN2の特徴について明らかにした もの Tanaka H, Iguchi N, Egydio de Carvalho C, Tadokoro Y, <u>Yomogida K.</u> , Nishimune Y.
21. GATA-1 testis	共	2003年07月	Genes Cells.	転写因子GATA-1の精巣特異的発現の調節領域をトランスジェックマ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
activation region is essential for Sertoli cell-specific expression of GATA-1 gene in transgenic mouse. (査読付)			vol.8(7), (2003) 619-30.	ウスにより同定したものの Wakabayashi J, <u>Yomogida K</u> , Nakajima O, Yoh K, Takahashi S, Engel JD, Ohneda K, Yamamoto M
22.Expression of Tom34 splicing isoforms in mouse testis and knockout of Tom34 in mice. (査読付)	共	2003年05月	J Biochem (Tokyo). vol.133 (5), (2003) 625-31.	分子シャペロンであるTom34のスプライシングアイソフォームが精巣で発現していることを明らかにし、Tom34の欠失による影響を検討したものの。 Terada K, Ueno S, <u>Yomogida K</u> , Imai T, Kiyonari H, Takeda N, Yano M, Abe S, Aizawa S, Mori M
23.Conditional loss of PTEN leads to testicular teratoma and enhances embryonic germ cell production. (査読付)	共	2003年04月	Development, vol.130(8) (2003) 1691-1700	PTENの発現抑制により精巣テラトーマが誘発されることを明らかにしたものの Kimura K, Suzuki A, Fujita Y, <u>Yomogida K</u> , Lomeli H, Asada N, Ikeuchi M, Nagy A, Mak TW, Nakano T
24.Mouse germ cell-less as an essential component for nuclear integrity. (査読付)	共	2003年02月	Mol Cell Biol. vol.3(4) (2003) 1304-15.	シヨウジョウバエのgerm cell lessタンパクのマウスホモログの発現を確認し、欠失マウスを作成し、その機能を明らかにしたものの Kimura T, Ito C, Watanabe W, Takahashi T, Ikawa M, <u>Yomogida K</u> , Fujita Y, Ikeuchi Mi, Asada N, Matsumiya K, Okuyama A, Okabe M, Toshimori K, Nakano T
25.Type XXVI collagen, a new member of the collagen family, is specifically expressed in the testis and ovary. (査読付)	共	2002年10月04日	J Biol Chem. vol.277(40), (2002) 37678-84.	新規コラーゲンXXVIが性腺に特異的に発現することを明らかにしたものの Sato K, <u>Yomogida K</u> , Wada T, Yorihuzi T, Nishimune Y, Hosokawa N, and Nagata K
26.Electroporated transgene-rescued spermatogenesis in infertile mutant mice with a sertoli cell defect. (査読付)	共	2002年09月	Biol Reprod. vol.67(3), (2002) 712-7.	in vivo EP法によりセルトリ細胞への遺伝子導入により支持細胞遺伝子異常による精子形成不全を回復することを示したものの <u>Yomogida K</u> , Yagura Y, Nishimune Y.
27.Molecular cloning and characterization of oppo 1: a haploid germ cell-specific complementary DNA encoding sperm tail protein. (査読付)	共	2002年07月	Biol Reprod. vol.67(1), (2002) 1-7.	精子尾部の形成にかかわる新規遺伝子oppo-1について解析したものの Nakamura Y, Tanaka H, Koga M, Miyagawa Y, Iguchi N, Egydio de Carvalho C, <u>Yomogida K</u> , Nozaki M, Nojima H, Matsumiya K, Okuyama A, Nishimune Y
28.Utility of immunohistochemical detection of prostate-specific Ets for the diagnosis of	共	2002年05月	Int J Urol. vol.9(3), (2002) 167-72.	前立腺特異的転写因子Etsの発現状態により前立腺腫瘍の悪性度の判定ができることを示したものの Tsujimoto Y, Nonomura N, Takayama H, <u>Yomogida K</u> , Nozawa M, Nishimura K, Okuyama A, Nozaki M, Aozasa K

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
benign and malignant prostatic epithelial lesions. (査読付)				
29.Homeostatic regulation of germinal stem cell proliferation by the GDNF/FSH pathway. (査読付)	共	2002年04月	Mech Dev. vol. 113(1), (2002) 29-39.	生殖幹細胞の増殖分化の制御機構を明らかにしたもの Tadokoro Y, <u>Yomogida K</u> , Ohta H, Tohda A, Nishimune Y.
30.Two mouse piwi-related genes: miwi and mili. (査読付)	共	2001年10月	Mech Dev. vol. 108(1-2), (2001) 121-33	幹細胞の自己複製に関わるpiwiファミリー遺伝子の関連遺伝子miwiとmiliの同定とその機能解析から精子形成にかかわることを明らかにしたもの Kuramochi-Miyagawa S, Kimura T, <u>Yomogida K</u> , Kuroiwa A, Tadokoro Y, Fujita Y, Sato M, Matsuda Y, Nakano T
31.Testosterone suppresses spermatogenesis in juvenile spermatogonial depletion (jsd) mice. (査読付)	共	2001年08月	Biol Reprod. vol. 65(2), (2001) 532-7.	精子形成障害を示すjsd変異マウスにおけるテストステロンの発現抑制を明らかにしたもの Tohda A, Matsumiya K, Tadokoro Y, <u>Yomogida K</u> , Miyagawa Y, Dohmae K, Okuyama A, Nishimune Y
32.Nested genomic structure of haploid germ cell specific haspin gene. (査読付)	共	2001年04月 04日	Gene. vol. 267 (1), (2001) 49-54.	半数体特異的遺伝子haspinのゲノム構造を明らかにしたもの Yoshimura Y, Tanaka H, Nozaki M, <u>Yomogida K</u> , Yasunaga T, Nishimune Y.
33.Transcription factor BACH1 is recruited to the nucleus by its novel alternative spliced isoform. (査読付)	共	2001年03月 09日	J Biol Chem. vol. 276(10), (2001) 7278-84.	転写因子BACH1の核内への移動にはそのスプライシングアイソフォームが関わることを明らかにしたもの Kanezaki R, Toki T, Yokoyama M, <u>Yomogida K</u> , Sugiyama K, Yamamoto M, Igarashi K, Ito E.
34.Defect in germ cells, not in supporting cells, is the cause of male infertility in the jsd mutant mouse: proliferation of spermatogonial stem cells without differentiation. (査読付)	共	2001年01月	Int J Androl. vol. 24(1), (2001) 15-23.	精子形成障害を示すjsd変異マウスにおいて精原細胞が分化できずに増殖していることを明らかにしたもの Ohta H, <u>Yomogida K</u> , Tadokoro Y, Tohda A, Dohmae K, Nishimune Y.
35.Isolation and characterization of a haploid germ cell-specific novel complementary deoxyribonucleic acid; testis-specific homologue of succinyl CoA:3-Oxo acid CoA transferase. (査読付)	共	2000年12月	Biol Reprod. vol. 63(6), (2000) 1601-9.	半数体特異的発現をするsuccinylCoA:3-Oxo acid CoA transferase ホモログのクローニングとその特性を解析したもの Koga M, Tanaka H, <u>Yomogida K</u> , Nozaki M, Tsuchida J, Ohta H, Nakamura Y, Masai K, Yoshimura Y, Yamanaka M, Iguchi N, Nojima H, Matsumiya K, Okuyama A, Nishimune Y.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
付) 36. Identification and characterization of testis specific ornithine decarboxylase antizyme (OAZ-t) gene: expression in haploid germ cells and polyamine-induced frameshifting. (査読付)	共	2000年04月	Genes Cells. vol.5(4), (2000) 265-76.	半数体精子細胞特異的発現をするornithine decarboxylase antizyme遺伝子の単離と特質の解析結果 Tosaka Y, Tanaka H, Yano Y, Masai K, Nozaki M, <u>Yomogida K</u> , Otani S, Nojima H, Nishimune Y.
37. Real-time observation of transplanted 'green germ cells': proliferation and differentiation of stem cells. (査読付)	共	2000年04月	Dev Growth Differ. vol.42 (2), (2000) 105-12.	GFPマウス由来生殖幹細胞の移植により幹細胞の増殖と分化の状況をリアルタイムで追跡することで明らかにしたもの Ohta H, <u>Yomogida K</u> , Yamada S, Okabe M, Nishimune Y.
38. Molecular cloning and characterization of phosphatidylcholine transfer protein-like protein gene expressed in murine haploid germ cells. (査読付)	共	2000年01月	Biol Reprod. vol.62(6), (2000) 1694-1701.	半数体精子細胞特異的に発現するphosphatidylcholine transferase様タンパク質遺伝子のクローニングと特質を明らかにしたもの Yamanaka M, Koga M, Tanaka H, Nakamura Y, Ohta H, <u>Yomogida K</u> , Tsuchida J, Iguchi N, Nojima H, Nozaki M, Matsumiya K, Okuyama A, Toshimori K, Nishimune Y.
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 微弱振動磁界凍結による凍結保存細胞の生存率の改善条件の検討	共	2019年12月6日	日本分子生物学会第42回大会	梅内菜々子, 國谷かおり, 奥田華奈, 河内愛子, 蓬田健太郎新規凍結法により培養細胞の生存率の改善効果について示したもの
2. 微弱振動磁界による凍結組織標本の品質改善効果の検討	共	2019年12月5日	日本分子生物学会第42回大会	凍結組織標本の品質を新規凍結法により改善されることを示したものの
3. 妊産期における続発性骨粗鬆症モデルと閉経後骨粗鬆症モデルの比較	共	2019年5月18日	日本栄養・食糧学会第73回大会	続発性骨粗鬆症モデルと閉経後骨粗鬆症モデルの比較から、骨粗鬆症の要因として閉経よりも低栄養の寄与が大きいことを示したものの
4. 凍結保護剤を使用しない細胞凍結保存法の検討	共	2018年11月	第41回日本分子生物学会	石井美憂, 梅内菜々子, 小酒美紅, 仲西のぞみ, 奥田華奈, 河内愛子, <u>蓬田健太郎</u>
5. 雄性生殖細胞のアルキル化剤感受性における癌抑制遺伝子p-53の役割	共	2018年11月	第41回日本分子生物学会	梅内菜々子, 石井美憂, 國谷かおり, 野村佳奈, <u>蓬田健太郎</u>
6. 女子学生の体組成および体型認識の現状-第2報-	共	2018年5月	第72回日本栄養・食糧学会	異都香紗, 岡本彩希, 石井美憂, 大平耕司, <u>蓬田健太郎</u>
7. 凍結保護剤を使用しない細胞・食品の凍	共	2017年12月	第40回日本分子生物学会年会	河内愛子, 奥田華奈, 石井美憂, <u>蓬田健太郎</u>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
結保存法の検討				
8. 女子学生の体組成および体型認識の現状	共	2017年5月	第71回日本栄養・食料学会大会	巽 都香沙, 圓岡 由衣, 森本 亮祐, 近藤あかり, 蓬田健太郎
9. アポトーシス関連因子Apop-1と血糖制御機構との関連性	共	2016年9月	第89回日本生化学会大会	蓬田健太郎, 上田奈美, 柴田彩花, 三木彩花, 物申真理菜, 山本香奈子, 石井美憂, 井橋歩花, 福尾恵介
10. 若年女性の体型に関する意識と栄養素摂取量の現状	共	2016年5月	第70回日本栄養・食糧学会大会	圓岡由衣, 蓬田健太郎
11. アポトーシス関連因子Apop-1が血糖制御に与える影響	共	2016年5月	第70回日本栄養・食糧学会大会	上田奈美, 織野有希, 吉田由加子, 福尾恵介, 蓬田健太郎
12. 母乳栄養研究のためのマウス搾乳モデルの確立	共	2016年5月	第70回日本栄養・食糧学会大会	磯崎絵美, 越智沙織, 蓬田健太郎
13. マウス搾乳条件の最適化とその応用	共	2015年12月	第38回日本分子生物学会	越智沙織, 巽梨花, 町田味優, 磯崎絵美, 圓岡由衣, 蓬田健太郎
14. CAS凍結法の細胞凍結における有効性の検討	共	2015年12月	第38 回日本分子生物学会	河内愛子, 蓬田健太郎, 大和田哲男, 奥田華奈, 塚原璃沙子
15. An apoptosis relating factor Apop-1 affects the regulation of blood glucose.	共	2015年12月	第38 回日本分子生物学会	Ueda N, Yamamoto N, Orino Y, Yoshida Y, Fukuo K, <u>Yomogida K.</u>
16. An apoptosis relating factor Apop-1 affects the regulation of blood glucose.	共	2015年5月	第12回アジア栄養学会議	Ueda N, Iyoda N, Yao M, Maeda H, Fukuo K, <u>Yomogida K.</u>
17. マウスの搾乳法の確立とその応用	共	2014年11月	第37回 日本分子生物学会	越智沙織, 竹田真悠, 北川舞依, 穂久舞, 蓬田健太郎
18. Deletion of a novel apoptosis relating factor Apop-1 affect the regulation of blood glucose.	共	2014年11月	第37回 日本分子生物学会	N. Ueda, N. Iyoda, M. Yao, H. Maeda, A. Kawauchi, K. Fukuo, <u>K. Yomogida</u>
19. Analysis of the function of DNA repairing factor, Rad 18 in germinal stem cell of mice.	共	2014年11月	第37回 日本分子生物学会	N. Iyoda, N. Ueda, K. M. Yao, H. Maeda, S. Tateishi, <u>K. Yomogida</u>
20. Roles of DNA repairing factor Rad18 in germinal stem cell	共	2014年5月	第47回 日本発生生物学会	N. Iyoda, N. Ueda, K. C. Sugiyama, S. Tateishi, <u>K. Yomogida</u>
21. 母乳栄養のマウス評価モデル系の検討	共	2014年4月	第68回 日本栄養・食糧学会	越智沙織, 穂久舞, 伊豫田奈津子, 河内愛子, 上田奈美, 蓬田健太郎
22. 「食育プログラム」構築に向けて	単	2013年12月8日	第22回 日本乳幼児教育学会	シンポジウムの演題として本学附属幼稚園における食育活動を軸とした幼児期の食育プログラムの構築について解説したもの
23. マウスの搾乳法の最適化とその応用	共	2013年12月	第36回 日本分子生物学会	中山由子, 玉城真希, 穂久舞, 越智沙織, 蓬田健太郎 乳汁分泌への薬剤や栄養状態の影響を解析するモデル系としてマウスの可能性について検討したもの
24. Stress response to DNA damage and control of apoptosis in	共	2013年5月	第46回 日本発生生物学会	N. Iyoda, M. Akihisa, N. Ueda, K. Fukuo, K. Yomogida マウス生殖幹細胞に対するDNA損傷ストレスに対するDNA修復応答と異常細胞のアポトーシスによる除去機構におけるDNA修復因子RAD18の役割のついて解析したもの

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
germinal stem cell 25. Diet Poor in Calcium During Pregnant and Lactational Period Have a Bad Effect on Milk Production	共	2012年12月	第35回 日本分子生物学会	M. Akihisa, S. Ochi, C. Ohshima, T. Fujishin, M. Nishimura, N. Sutani, <u>K. Yomogida</u>
26. Stress Response to DNA Damage and Control of Apoptosis in Germinal Stem Cell	共	2012年12月	第35回 日本分子生物学会	N. Iyoda, M. Harada, S. Tanigawa, S. Tateishi, K. Fukuo, <u>K. Yomogida</u>
27. 卵巣摘出マウスにおける習慣性運動の負荷が骨形成に及ぼす影響について	共	2012年12月	第11回 日本栄養改善学会近畿支部学術総会	越智沙織、進藤弥生、今村友美、遠藤倫代、伊豫田奈津子、穂久舞、小神静香、左近田麻紀、里中理恵、須野早貴、竹中麻菜、家辺愛子、蓬田健太郎、堀江登
28. 妊娠・授乳期のカルシウム摂取不足が乳汁分泌に与える影響	共	2012年12月	第11回 日本栄養改善学会近畿支部学術総会	穂久舞、越智沙織、大島千佳、藤新友美、遠藤倫代、蓬田健太郎
29. Roles of Apop-1 in regulation of blood glucose	共	2012年12月	第11回 日本栄養改善学会近畿支部学術総会	伊豫田奈津子、原田皆実、谷川聖佳、立石智、福尾恵介、蓬田健太郎
30. Roles of DNA repairing factor Rad18 in maintenance of mouse spermatogonial stem cell	共	2012年5月	第45回 日本発生生物学会	N. Iyoda, M. Akihisa, S. Ochi, S. Tateishi, <u>K. Yomogida</u>
31. 妊娠・授乳期のカルシウム制限が乳汁分泌に与える影響	共	2011年12月	第34回 日本分子生物学会	遠藤倫代、道場有梨奈、岡崎千恵美、畠中絵美、山田直子、越智沙織、蓬田健太郎 マウスをモデル系として妊娠・授乳期のカルシウム制限が乳汁分泌量の減少と成分比率に影響することを示したものの。
32. Rad18 is required for double-stranded break repair and long-term spermatogenesis	共	2011年12月	第34回 日本分子生物学会	S. Tateishi, K. Watanabe, J. Sun, K. Iwabuchi, <u>K. Yomogida</u> DNA修復因子Rad18が生殖幹細胞の長期生存にかかわることをK0マウスの解析から示したものの。
33. 生殖幹細胞におけるDNA修復因子Rad18の細胞障害ストレスに対する応答	共	2011年12月	第34回 日本分子生物学会	蓬田健太郎、伊豫田奈津子、穂久舞、澤田啓子、越智沙織、立石智 DNA修復因子Rad18が生殖幹細胞の細胞障害ストレスに起因するDNA損傷応答における役割をK0マウスを用いて解析したものの
34. Different responsibility of mammalian germinal stem cell to cell damage stress between growth phase and mature phase	共	2011年05月	第44回 日本発生生物学会	N. Iyoda, M. Endo, S. Tateishi, <u>K. Yomogida</u> 成長期と成熟期でマウスの生殖幹細胞のストレス応答に違いがあることを示したものの。
35. 妊娠・授乳期のカルシウム制限が乳汁分泌に及ぼす影響	共	2010年12月	第33回 日本分子生物学会	遠藤倫代、山口小百合、向真生、山田栄里、蓬田健太郎 マウスをモデル系として、妊娠・授乳期のカルシウム制限が、乳汁分泌に与える影響を検討したものの。
36. Difference in quality control system of mammalian germinal	共	2010年12月	第33回 日本分子生物学会	蓬田健太郎、藤本寿々、遠藤倫代、山本遥菜、山田直子、立石智、乾彩子、伊豫田奈津子、奥野早耶、長谷川知美 生殖幹細胞が、成長期と成熟期において維持機構に違いがあることを見出したものの。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
stem cell between growth phase and mature phase				
37. 妊娠・授乳期のカルシウム制限が離乳後の骨代謝に及ぼす影響	共	2010年05月	第64回 日本栄養・食糧学会	遠藤倫代、石井 理絵、牧野 頌子、丸橋 明里、山田 直子、寺田 信行、 <u>蓬田 健太郎</u> マウスをモデル系として妊娠授乳期のカルシウム制限が子のカルシウム代謝に与える影響を健闘したもの。
38. Difference in quality control system of mammalian germinal stem cell between growth phase and mature phase	共	2010年05月	第43回 日本発生生物学学会	藤本寿々、遠藤倫代、山本遥菜、伊豫田奈津子、乾彩子、奥野早耶、田所優子、 <u>蓬田健太郎</u> マウス生殖幹細胞の成長期と成熟期のストレス応答に違いを見出したもの。
39. 雄性生殖幹細胞増殖におけるGDNFによるOct-3/4の発現制御機構	共	2009年12月	第32回 日本分子生物学学会	<u>蓬田健太郎</u> 、藤本寿々、田所優子、山田直子、遠藤倫代、伊藤沙央里、道盛法子 GDNF増殖刺激により生殖幹細胞におけるOct-3/4の発現が抑制されることを示したもの。
40. 幼稚園児を対象とした「双方向性食育プログラム」の検討と食生活評価法の検討	共	2009年09月	第56回 日本栄養改善学会学術総会	伊藤沙央里、猪塚倫代、岸本三香子、山本周美、 <u>蓬田健太郎</u> 記録式食育ツールを用い、フィードバックすることにより食生活の改善の経過を検討したもの。
41. 幼児期の食習慣および生活リズムの確立と保護者の食意識との関連性	共	2009年09月	第56回 日本栄養改善学会学術総会	岸本三香子、伊藤沙央里、遠藤倫代、 <u>蓬田健太郎</u> 幼児期の生活リズムと保護者の食意識との関連性を調査検討したもの。
42. 幼児の骨密度と親との関連性について	共	2009年09月	第56回 日本栄養改善学会学術総会	遠藤倫代、伊藤沙央里、岸本三香子、 <u>蓬田健太郎</u> 親と幼児期の子供の骨密度の関連性について検討したもの。
43. 幼稚園児を対象とした「双方向性食育プログラム」の検討	共	2009年05月	第63回 日本栄養・食糧学会大会	伊藤沙央里、猪塚倫代、岸本三香子、山本周美、隈部磨利依、坂口久美子、中村亜矢子、廣崎有美、水谷孝子、 <u>蓬田健太郎</u> 記録式食育ツールの有効性を健闘したもの。
44. 妊娠・授乳期のカルシウム制限によるCa調節機構に及ぼす影響	共	2009年05月	第63回 日本栄養・食糧学会大会	猪塚倫代、中山岬、深井美絵、日比野麻子、山田直子、寺田信行、 <u>蓬田健太郎</u> マウスをモデル系とし、妊娠・授乳期のカルシウム制限が母体と子のカルシウム代謝に与える影響を検討したもの。
45. 再生増殖期のマウス生殖幹細胞におけるOct-3/4の発現解析	共	2008年12月	山本遥菜、阪尾寿々、伊藤沙央里、橋本佳奈、福田舞子、立石智、 <u>蓬田健太郎</u>	阪尾寿々、山本遥菜、伊藤沙央里、田原衣里子、 <u>蓬田健太郎</u> 生殖幹細胞が成長や再生の際に増殖する場合、幹細胞でのOct-3/4の発現が抑制されることを見出したもの。
46. アルキル化剤によるDNA損傷が生殖幹細胞の増殖に与える影響の検討	共	2008年12月	第31回 日本分子生物学学会	山本遥菜、阪尾寿々、伊藤沙央里、橋本佳奈、福田舞子、立石智、 <u>蓬田健太郎</u> 生殖幹細胞におけるDNA損傷応答を検討した結果、成長期と成熟期以降とでその応答性に違いがある可能性を示したもの。
47. 食餌中Ca含有率の制限が妊娠・授乳期の母体の骨代謝に与える影響の検討	共	2008年12月	第31回 日本分子生物学学会	木村みどり、猪塚倫代、松井麻侑、山田直子、寺田信行、 <u>蓬田健太郎</u> マウスモデル系において妊娠・授乳期の母体におけるCa制限が、その骨代謝に与える影響を検討したもの。
48. 授乳中の母体マウスのカルシウム欠乏が乳仔の骨代謝に与える影響の検討	共	2008年12月	第31回 日本分子生物学学会	松井麻侑、猪塚倫代、木村みどり、山田直子、寺田信行、 <u>蓬田健太郎</u> マウスモデル系において、母体のカルシウム制限が乳仔の骨代謝に与える影響について検討したもの。
49. Dynamic response of DNA repair factors to artificial DNA damage in mouse germinal stem cell	共	2008年05月	第41回 日本発生生物学学会	阪尾寿々、立石智、山本遥菜、伊藤沙央里、 <u>蓬田健太郎</u> 生殖幹細胞におけるDNA損傷に対する修復応答と幹細胞維持機構についてDNA修復因子RAD18の機能を中心に解析したもの。
50. 妊娠・授乳期におけ	共	2008年05月	第62回 日本栄	猪塚倫代、木村みどり、松井麻侑、 <u>蓬田健太郎</u>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
るカルシウム摂取制限の骨代謝への影響			養・食糧学会大会	マウスをモデル系として、妊娠・授乳期の母体におけるカルシウム制限が、母体と仔のカルシウム代謝に及ぼす影響について検討したもの。
51. マウス雄性生殖幹細胞の純化と移植効率の検討	共	2007年12月	第30回日本分子生物学会	阪尾寿々、山本遙菜、伊藤沙央里、木村沙紀、廣野雅子、 蓬田健太郎 マウス雄性生殖幹細胞を純化するための細胞表面マーカーについて検討し、その必要十分条件をけつてしたもの。
52. DNA損傷とマウス生殖幹細胞の品質維持機構の検討	共	2007年12月	第30回日本分子生物学会	山本遙菜、阪尾寿々、伊藤沙央里、木村沙紀、廣野雅子、立石智、 蓬田健太郎 雄マウスにアルキル化剤であるブスルファンを投与し、DNA損傷を惹起し、生殖細胞のアポトーシスによる異常細胞の除去と再生機構について検討したもの。とくにDNA修復因子RAD18の欠損マウスでの修復が不能となることからRAD18が幹細胞の維持に重要であることを示したもの。
53. 母体のカルシウム制限が胎仔・乳仔の骨代謝へ与える影響	共	2007年12月	第30回日本分子生物学会	松井麻侑、猪塚倫代、木村みどり、岡田奈三、山田直子、寺田信行、 蓬田健太郎 妊娠授乳期の母マウスに様々なCa含有量の食餌を与え、胎仔・乳仔の骨代謝にどのような影響が生じるか検討したもの。
54. 妊娠・授乳が母体マウスの骨代謝に与える影響の検討	共	2007年12月	第30回日本分子生物学会	木村みどり、猪塚倫代、松井麻侑、井上真子、高橋美由紀、山田直子、寺田信行、 蓬田健太郎 妊娠・授乳期のマウスに様々なCa含有量の食餌を与え、母体の骨代謝にどのような影響が生じるかを検討したもの。
55. 妊娠・授乳による腸管Caトランスポーターの発現調節機構の解析	共	2007年12月	第30回日本分子生物学会	猪塚倫代、木村みどり、松井麻侑、岡田奈三、高橋美由紀、井上真子、 蓬田健太郎 妊娠・授乳期の母体マウスにCa制限食を与え、腸管でのCa吸収にどのような影響が生じるかをCaトランスポーターの発現を指標に検討したもの。
56. 生殖幹細胞の維持と品質保証機構	共	2007年11月	公開シンポジウム「生殖細胞の発生プロセス・再プログラム化とエピジェネティクス」	蓬田健太郎 、立石智、阪尾寿々、山本遙菜 生殖幹細胞には、種の保存のために遺伝情報を正確に保存し伝えるための品質保証機構が必要である。この品質保証機構には量的な保証機構と質的な保証機構が存在し、質的な保証機構において遺伝子修復因子RAD18が重要な役割を担っていることを明らかにした。
57. FACS解析によるマウス雄性生殖幹細胞の純化ならびに分化に伴う幹細胞特性の変化	共	2007年07月	第17回日本サイトメトリー学会	阪尾寿々、田所優子、山本遙菜、山田直子、寺田信行、 蓬田健太郎 マウス生殖幹細胞をフローサイトメトリー法により純化するための方法と純化された幹細胞の性質について述べたもの。
58. Emergence of the transient Oct-3/4 negative undifferentiated spermatogonia in mouse testicular germinal stem cell differentiation	共	2007年05月	第40回日本発生生物学会	阪尾寿々、田所優子、山本遙菜、山田直子、寺田信行、 蓬田健太郎 生殖幹細胞には、幹細胞特異的転写因子Oct-3/4が発現するものとしていないものがあり、発現しない細胞群の性質について報告したものの。
59. 生殖幹細胞の維持と品質保証機構	共	2006年12月	公開シンポジウム「生殖細胞の発生プロセス・再プログラム化とエピジェネティクス」	蓬田健太郎 、立石智 生殖幹細胞の品質管理に関わる因子として遺伝子修復因子RAD18に着目し、幹細胞での発現を確認した。さらに、ノックアウトマウスを作製し、生殖幹細胞が加齢に従い減少していくことを突き止めた。
60. マウス精子細胞特異的遺伝子Galnt15の解析	共	2006年05月	第39回日本発生生物学会	八木翼、 蓬田健太郎 、谷川葉子、土居洋文、小宮透 マウス精子細胞に特異的に発現する遺伝子としてGalnt15を同定し、その発現調節機構をin vivo electroporation法により解析した。
61. Maintenance of germinal stem cell in the microenvironment	単	2005年11月	International Symposium on Germ Cells, Epigenetics, Reprogramming and Embryonic	生殖幹細胞の維持機構についての解析の結果、幹細胞型c-kit分子の存在を同定し、幹細胞を維持する微小環境下において、膜型KLと分泌型KLとの相互作用により維持と分化の運命決定がなされることを明らかにした。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
62. 組織幹細胞の増殖・分化の制御機構の解析	単	2005年02月	Stem Cells.	幹細胞には、新規糖修飾を受けたc-kitが存在する事をFACSを利用した幹細胞単離法により明らかにした。さらに分泌型KLが結合する事により、その未分化性が維持される事を示した。
63. 生殖幹細胞の未分化性の維持機構	単	2004年11月		生殖幹細胞の維持には、新規の糖鎖修飾をうけたc-kitが関与しており、分泌型KLとの相互作用により未分化性が維持され、膜型KLと相互作用により分化へと進むことを、FACSによる細胞単離法と精細胞移植法ならびに生体内遺伝子導入法で明らかにした。
64. マウス精巣生殖幹細胞をモデル系とした組織幹細胞の増殖分化機構の解析	単	2004年04月		生殖幹細胞系をモデル系として幹細胞の増殖と分化の制御機構の解析を行ない、幹細胞には自己保存のための細胞集団と組織再生のための細胞集団の2つから成り立つ事を明らかにした。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. G Suite for education活用による情報伝達システムの構築	共	2019年9月6日	2019年度 私情協 教育イノベーション大会	本学におけるICTインフラ整備と遠隔授業に向けた情報伝達システムの構築状況についての報告
2. 阪神パークのチンパンジー。(査読有)	共	2016年3月31日	武庫川女子大学紀要（自然科学編），63，（2016）13-19	阪神パークにおけるチンパンジー飼育展示に関する歴史的考察
6. 研究費の取得状況				
1. 文部科学省科学研究費特定領域研究 継続	共	2007年		生殖幹細胞の維持と分化の制御機構
2. 特定領域研究（継続領域） 継続		2007年		生殖幹細胞の維持と分化の制御機構
3. 文部科学省科学研究費特定領域研究 新規	共	2006年		生殖幹細胞の維持と分化の制御機構
4. 特定領域研究（継続領域） 計画研究 新規		2006年		生殖幹細胞の維持と分化の制御機構
5. 科学研究費 特定領域研究 継続	単	2004年		生殖細胞における自己保存システムとその分子基盤の解析
6. 特定領域研究 継続		2004年		生殖幹細胞における自己保存システムとその分子基盤の解析
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2009年～現在	日本栄養改善学会			
2. 2009年～現在	日本栄養食糧学会			
3. 2006年～現在	日本食育学会			
4. 1993年～現在	日本実験動物学会			
5. 1993年～現在	日本発生生物学会			
6. 1991年～現在	日本生化学会			
7. 1991年～現在	日本分子生物学会			